

## 校長ニューズレター(第38号・1月号) 宜野湾市立長田小学校校長:横山芳春



### 「どの子も発言したくなる授業」

5年生の教室でみた授業。教材は、国語で「わらぐつの中の神様」(杉みき子)。

あらすじを紹介しておこう。

雪国で3世代いっしょに暮らしている家族の物語。

雪が降っているある夜、マサエは、おばあちゃんとかたつにあたりながら、本を読んでいた。明日、学校でスキーがあるのだが、今日はいたスキー靴はびしょびしょ。明日までに乾くかしらというマサエに、おばあちゃんが「かわかんかったら、わらぐつはいていきな」と言う。

マサエが「やだあ、わらぐつなんて、みったくない(みっともない)」と言うと、おばあちゃんが、「そういったもんでもないさ。わらぐつはいいもんだ。あったかいし、軽いし、すべらんし。それに、わらぐつの中には神様がいなさるでね」と、わらぐつの中に神様がいる話を始めた。

昔、この近くの村におみつさんという働き者の娘さんが住んでいた。彼女がある秋の朝、市へ野菜を売りに行く途中、げた屋さんの前でかわいい雪げたを見かけ、欲してたまらなくなった。だけど、お小遣いで買える値段でない。家に帰って両親に頼んだが、小さい弟、妹達も欲しいと言い出し、自分のおねだりどころではなかった。

そこで、自分でお金を作ることを思い立つ。わらぐつを編んで、それを売ってお金を貯めようと思った。いつもお父さんがわらぐつを編んでいるのを見ているので、自分もできるだろうと考えたのだ。

おみつさんは、一生懸命、心をこめてわらぐつを編んだ。できあがったわらぐつは、上から下ま

ですき間なくきっちりと編みこまれてはいるが、左右の大きさも違うし、変な格好だ。家族からも「売れるかいなあ？」と笑ったり心配されたが、朝市の日、おみつさんは元気に市に出て行った。



野菜のはしっこにわらぐつを置き、「わらぐつはどうですね。」と勧めてはみるのだが、なかなか売れない。それどころか、「へえ、それ、わらぐつかね。おらまた、わらまんじゅうかと思った。」と言う口の悪い人もおり、「やっぱり、わたしが作ったんじゃだめなのかなあ。」とがっかりしてきた。

あきらめてもう帰ろうと思っていると、ひとりの若い大工さんが来て、そのわらぐつを見せてくれと言う。「あんまり、みっともよくねえわらぐつで・・・」とおみつさんが言うと、大工さんはわらぐつをしばらく眺めてから、今度はおみつさんの顔を見つめ、「よし、もらっとこう。」と言ってそのわらぐつを買ってくれたのだ。おみつさんは嬉しくて嬉しくて、その大工さんをおがみたいような気がしたのだ。

次にわらぐつを編んで市に行くと、またその大工さんがやってきて買ってくれた。そんなことが何度か続き、おみつさんは不思議に思って大工さんにこう尋ねた。

「おらの作ったわらぐつ、もしかしたら、すぐいたんだりして、それで、しょっちゅう買ってくれるんですか。」

すると、

「ああ、そりゃ、じょうぶでいいわらぐつだから、仕事場の仲間や、近所の人たちの分も買ってやったんだよ。」

と大工さん。それから、

「いい仕事ってのは、見かけで決まるもんじゃない。使う人の身になって、使いやすく、じょうぶで長持ちするように作るのが、ほんとのいい仕事ってものだ。」

それから大工さんは、いきなりしゃがみこんで、おみつさんの顔を見つめながら、

「なあ、おれのうちへ来てくれないか。そしていつまでもうちにいて、おれにわらぐつを作ってくれないかな。」

おみつさんは、ぼかんとして、大工さんの顔を見て、しばらくして、それが、おみつさんにおよめに来てくれということだと気がつくと、おみつさんの白いほおが夕焼けのように赤くなった。

「使う人の身になって、心をこめて作ったものには、神様が入っているのと同じなんだ。それを作った人も、神様とおんなじだ。おまんが来てくれたら、神様みたいに大事にするつもりだよ。」

——ってね。どうだい、いい話だろ。とおばあちゃん。そして、マサエは、そのおみつさんというのが、実は、おばあちゃんのことだということに気づいたのだ。その大工さんは、おじいちゃんだったのだ！

「この家におよめに来ると、すぐ、おじいちゃんが買ってくれたんだよ。」と言っておばあちゃんは、大切にしまってあった雪ゲタを見せてくれました。マサエはそれを見てこう言った。

「おじいちゃんがおばあちゃんのために、せっせと働いて買ってくれたんだから、この雪ゲタの中にも神様がいるかもしれないね」

授業で大事なことは、つぎのことである。

- ①教材の山場を、学級の全員で追求すること。
- ②全員で追求できるように、学級のすべての「子どもの思考が思わず回転しはじめる」発問をすること。

※山場とは、「最も重要な場面」のこと。

※発問とは、「子どもに思考をうながすためにおこなうもの」である。

さて、担任の先生はどこに山場をおいたのでしょうか？

それは、「大工さんがおみつさんとの結婚を決意するまでの心の動き」を山場にしたのです。

子どもの思考を思わず回転させる発問は、つぎのものでした。

「大工さんはいつ結婚を決意したのですか。」

この発問によって、子どもたちから多様な考えが湧きでてきました。

- ①大工さんがはじめておみつさんに会った時。
- ②わらぐつを何回も買ううちに。
- ③（何度も買ってくれるのが不思議がられて）おみつさんにそのことをたずねられたとき。

子どもたちの考えを整理すると上記のようになりました。そのご担任の先生は、発言のなかった子どもたちに、どの考えに近いのかを聞いたり、ちがう考えがまだあるのかなど聞きました。これで全員を授業に参加させていったのです。

それから、それぞれの考えの根拠を聞き出します。根拠を聞くことで、子どもたちの思考をさらに深めていったのです。このようにして、授業時間は過ぎていきました。

授業後に、取材に来ていた沖縄タイムス社の田嶋記者が、学級に残って子どもたちの様子を見たりインタビューをしていました。

子どもたちからは、「いつもは発言しない子が発言していた」という感想があったとのこと。

これは重要な指摘です。なぜなら一般的な授業では、発言をする子どもはいつも決まっているのです。発言しない子どもはいつもしない状態が続くのです。それがこの授業では違っていたのです。

普段発言しない子も、普段から発言する子も等しく考え発言していたのです。

質の高い「発問」は、子どもたちに平等に思考をうながします。だれもが考えだす発問が優れているのです。

黒板にはりだしている教材に数名の子どもたちが授業後に集まっていたそうです。この子どもたちは、終わりのチャイムが鳴っても、思考は続いていたのです。ああでもないこうでもないという会話（授業が）続いていたのです。これこそ質の高い授業であったという証拠です。

ノートに書かれていた授業後の子どもたちの感想に、

「(いつ大工さんが結婚を決意したのか)はっきりしないまま、かねが鳴りました。次回の国語の授業で決着をつけたいです」、という記述があったことを、担任の先生が私に教えてくれました。

「いつ結婚を決意したのか」の発問に、おおむね3つの考えがでてきたことを前述した。しかし、授業ではこれらの考えの根拠を十分に話し合うことができなかつた。時間が足りなかつたのである。授業は、核の追求(先生をふめた学級全員で対話していく)の時間が十分に確保されなければならない。一般的に、授業の課題の一つはここにあります。

「決着をつけたい」という感想を書いた子ども

もは、せっかくおもしろくなってきた授業をこのままで終わらせたくなかつたのです。ベルが鳴ったら、「終わった!終わった!」とすぐに忘れてしまう授業ではなく、もっともっと追求してみたい授業だったということです

「私は、今日のスポットライト(筆者注:がんばった人)をあてる人を探しました。そこで見つけました!! それは、喜美子先生(筆者注:担任)と西江先生(筆者注:共同研究者)です。理由は二人とも、ちゃんと、私達と一緒に学んでいる!と思ったからです。また、公開授業をやりたいです。」(子どものノートから)

教師について、たいへん重要なことを指摘している子どもです。

授業は一方的に教師が子どもに教え込むものでもなく、また一方的に子ども任せにするものでもありません。授業は、子どもと教師が一緒になって教材の山場を追求していくものです。その時、授業前に教師が教材研究で導き出した解釈が有効な場合もあるし、子どもたちの発言で吹っ飛んでしまうこともある。教師が立ち往生をしてしまうことだってあるのです。授業はそれでいいと思う。子どもが、懸命になって考えはじめ、教師の想定していたことを越えてしまってもいいのである。それこそが子どもと教師の真剣な学び合いなのである。

この子どもの感想を読んでいると、教師と子どもが学び合っていたことがよく分かる。学級全員で教材の山場を追求し、教師と子ども、子どもと子どもが学び合う授業を、いくつも創りだしていきなものだ。

※この授業の様子は、文中にでてくる沖縄タイムス社の田嶋記者によって、23年12月28日のタイムス紙上で、「水曜グラフ」として紹介されました。